

読書感想文コンクール結果発表

第三回読書感想文コンクール入賞作品

館長賞 『犬から聞いた素敵な話』【山口花 著】
鍼灸学部 3 年 高田真弓子 さん

優秀賞 『叫び声』【大江健三郎 著】
修士課程 1 年 吉田遼平 さん

優秀賞 『Good Luck』【ロビラ・アレックス 著】
看護学部 2 年 宮崎雅子さん

優秀賞 『蜘蛛の糸』【芥川龍之介 著】
保健医療学部 2 年 小針亜九 さん

優秀賞 『地下室の手記』【ドストエフスキー 著】
鍼灸学部 2 年 中尾麗花 さん

第三回読書感想文コンクール応募者

院 生 原 敬昌・佐藤智紀
学部生 永田直美・山田巧弥・不破 智・原 智美・横坂 唯
原田涼平・中川知彦・浅草大将・井田佑二郎
河野将也・川辺拓也・南 大智

最優秀賞（図書館長賞）

『犬から聞いた素敵な話涙あふれる⑭の物語』

山口 花 著
東邦出版 発行

鍼灸学部 3 年 高田真弓子

この本を選んだのは、図書館で「読書感想文を書くのに良い本だよ」と勧められたのがきっかけです。もともと私は動物が好きなので、勧められて迷わずこの本に決めました。犬と人との関わりを描いた短編集であるこの本の 14 ある話の中で、特に印象に残ったのは東日本大震災で飼い主を失った「マックス」とその飼い主になった主人公との話でした。

「捨てられないものなんて、ひとつもない」という生き方を選んでいた主人公の女性は、「暮らしているマンションが、もし火事になりすべて燃えてしまったとしても、きっと私は困らない。」と考えていました。そんな生活とは、いったいどんなものなのか。私には想像ができません。さらに彼女は、ペットは「自ら背負い込む責任」だと考えており、ペットを飼っている同じマンションの住民のことが理解できませんでした。東日本大震災のあの日、あの地震を経験した主人公でしたが、その後の生活自体にはあまり大きな変化はなく、仕事に行き帰る毎日でした。そんなある日、いつものように仕事から帰ってきて、点けたテレビ番組で見た一枚の写真が彼女を変えていきました。そこに映っていた犬の“一瞬の表情”が頭からこびりついて離れなくなった女性は、「あの犬を助けたい」と思い、彼女自身でも驚きの決断と行動をします。すぐにボランティア団体に連絡を取り、1日かけて被災地へ向かう準備をし、翌日には地図を頼りに、おぼつかない運転で、片道4時間もかけて犬が保護されているところへ向かいました。犬や猫であふれかえるその場所で、ケージの奥におびえるように座っているその犬の表情に彼女は目を奪われ、テレビで見たときに感じた切ない感情がよみがえりました。犬を保護しているボランティアスタッフの説明も耳に入らず、「……この子、連れて帰ってもいいですか？」と涙声で訊ねた彼女に、スタッフは驚いてこのように言います。「この子は、まだ人間を信頼していません」「なれるまで“忍耐”の日々ですよ」と。それでも彼女は、その犬を連れて帰り、彼に最大級の幸せをつかんで欲しいとの思いを込めて「マックス」と名付けました。

その後の彼女は、とにかくマックスのために暮らすようになります。被災地から帰ってきた日はテレビも点けず、できるだけ物音を立てないようにして、

それから少しずつ音に慣れていくように、彼のことを考え続けて生活する姿に、私も息が詰まるような思いでした。有給休暇を使い切って、いつもの生活に戻った彼女ですが、その中身は以前とは変わっていました。それまでなら買っていた残業もせず、飲み会の誘いも断り、帰りに寄り道もしません。「自分の帰りを待っている者がいると思うと、改札に並ぶ人の列ももどかしい。1秒でも早く帰って、マックスに会いたかった。」と書かれた彼女の心境を、私は母親が自分の子供のもとに向かうときのようにも、恋人に会いに行くときのようにも感じました。しかし震災以降の環境の変化で恐怖を植え付けられてしまっているマックスは、1ヶ月経ってもなかなか慣れず、彼らの距離感は縮まらないままでした。“忍耐”のつらさに何度も心が折れそうになる彼女を、気が付くと私は応援しながら読んでいました。

そんな生活が2ヶ月目を迎えた頃のある日、不意に二人の距離が縮まります。マックスが携帯のカメラのシャッター音にもおびえることなく部屋の中を歩き回り、主人公の足元へ寄ってきて匂いを確認し、彼女の足先をなめはじめたのです。その時の驚きを、彼女は忘れないと書いています。そして、マックスは彼女に体重を預けるように横になりました。彼女はマックスを何度もなんども優しくなでました。体温の温かさ、寄り添ってもらえることの幸せを感じた彼女は、気持ちが爆発したように泣きました。「のど元が締め付けられるくらい痛く、こんなたくさんの涙が自分のどこにあったのだろうと思うくらい」泣いた彼女にあったのは、マックスが心を開いてくれたということへの嬉しさだけではなかったと思います。「捨てられないものなんて、ひとつもなかった」生活の頃とは違う自分を彼女は感じていたのではないのでしょうか。「守るべき命を抱くということは、それだけで生きる力がわきあがる。」という彼女の言葉からは、ペットを「自ら背負った責任」と考えていた頃とは別人のように感じました。私は、マックスと一緒にいる彼女の方が好きになれそうな気がしました。

私はこの5月に飼い犬を失いました。老衰でした。歳も歳だったので覚悟もしていたし納得もしていたつもりでした。しかし最近になって「寂しい」と感じていました。勉強の邪魔だと言っても膝に座り、そのまま眠ってしまう迷惑な彼でしたが、今は無性に懐かしく、複雑な気持ちでした。出会いやつながりはその時には気づかなくとも、自分を大きく変えるきっかけになる可能性があります。そう思って振り返ると、この本を読んだこと自体も一つの出会いであり、この本を薦めていただいたのも一つのつながりです。この本を読み終え、改めて彼との出会いに感謝し、彼を失ったことに対して漠然と感じていた寂しさが温かさに変わった気がしています。これからも小さな出会いを大切にし、つながりに感謝をして生きていこうと思います。

優 秀 賞

～ 『叫び声』の再読 大江健三郎にみる“しるし” ～

大学院修士課程1年 吉田遼平

『叫び声』は作者、大江健三郎が二十七歳の時に描き上げた小説である。その冒頭はサルトルの回想から始まる。

《ひとつの恐怖の時代を生きたフランス哲学者の回想によれば、人間みな
が遅すぎる救助をまちこがれている恐怖の時代には、誰かひとり遥かな
救いをもとめて叫び声をあげる時、それを聞く者はみな、その叫びが自
分自身の声ではなかったかと、わが耳を疑うということだ。》

若いアメリカ人、在日、混血孤児の仲間らと共に、二十歳の大学生である「僕」が《ここではないどこか》へとヨット旅行を夢見ながら共同生活を送り《黄金の青春の時》を体感する。だが、各々が宿命を背負い、自らが authentique（真真正な）な存在であることに確信が持てないでいる青年達の、行き場のない不安や渴望から生じる絶望や挫折感は、次第にふくれ上がり、やがては自身らの破滅へと一気に下降していく。行き着く果てに、「僕」が《荒涼とした》内なる恐怖の叫び声を聞くととき（すなわちこの小説が書き終えられるとき）、「僕」の逃げ場は失われる、というものである。

在日朝鮮人である登場人物「呉鷹男」は、小松川事件の少年をモデルにしたとされる。この小説には、安保、学生運動、在日問題といった六十年代当時の日本の社会を背景として、若者の青春を素材にした、喪失、狂気、暴走、死等といった暗くグロテスクなイメージが作中つねに横たわっており、そこに粘着質の湿っぽくじめじめとした独特な性のモチーフを持った文体が全体を覆う。また、作者自身を投影するであろう「僕」が物語を客観的に記す立場をとることによって、当時の日本の若者が抱えていた鬱屈を読者も率直に見てとることができる。

私が初めてこの小説に触れたのは、およそ五年前であった。当時は、作品の持つ独特の空気感に何とも言えぬ恐怖めいたものを覚え、読み進めることが大変困難であった。しかし、ノースロップ・フライがバルトを引用することで示した《読みなおす（リ・リーディングする）こと》（注釈1）に、確かな意味を持たせようとするならば、それは、作者がこの作品を書き上げたときの年齢と並んだ現在の私が、作品の再読を通じて見出すことができる、ある方向性を持った《探求（クエスト）》に他ならない。そして、それは作者自らの後記において、この作品を「《“しるし”をそなえた》、恢復をめざした青春小説である」と位置づけたその言葉の中に、手掛かりがある。

二〇〇二年九月末に行われた聖路加看護大学での特別講演にて作者は、医療者には、日々すぐそばで人が病気に苦しんで死んでいくということに慣れねばならない – the routinization of disaster (不幸のルーチン化) – の原則がたしかに存在することをまず示し、一方で小説家は《ものを見る目、その目で見ただ上での表現 – 観察し、考えた上での表現 – それをですね、決してルーチン化しない》のだという。この両者の違いを念頭に置いた上で、医療者にはたしかに先のような原則はあるが、その間にある人間性には、《それでも限界はあるのだ》、《単純ではないすじ道で、そこを超えているものもある》として、シモーヌ・ヴェイユのある引用（注釈2）を紹介する。この中でヴェイユが示す「不幸」という言葉が、先にあげた原則化されるような不幸、すなわち disaster としての不幸とはまったく違った意味で – これをヴェイユは“しるし”としている – 使われていることを強調するのである。それに苦しむことでその人の内部に独特な価値がつみたてられていくような「不幸」を“しるし”としている。さらに、ドストエフスキーの小説に見られる「心と体のつながり」、そしてそこからの「恢復」とを例にとり、注意力をこらした《本当のねがい》へ向けて、医療者たちがハイエラーキーを超えた所でタテやヨコのつながりを柔軟に使いこなすときに、そこには豊かな人間どうしの言葉のやりとり、すなわち narrative (物語ること、物語性) があるのではないだろうかと結ぶ。 – narrate という言葉から派生する、ある筋のとあった説明をする、という意味をそこに込めて。

エドワード・W・サイードもかつて述べたように、作者の文体にはどこか人の苦悩に共感する力があり、それは『叫び声』の以後記された『個人的な体験』の主人公「鳥（バード）」の決心から始まることにもなる作者自身の、障害者である息子の出生から、その共生にいたるまでの数十年のなかでの、「不幸」がもたらすある積極的なもの、として捉えることができるであろう。（『叫び声』を記した翌年にこの長男の出生があったのであるが、）人生の難所への認識と恢復への希求は、この二作によって成し遂げられたとしている。また作者の、純文学はつねに人を勇気づけるものでなくてはならない、というユマニストとしての視点は、作者の往年の師であった渡辺一夫の『狂気について』の中にも散見される（注釈3）。

『叫び声』は作品を通して、憂鬱な空気が全体を覆う。だが、現在の自分が当にいま青春時代にあり、その内面においてかなり衰弱していることを自覚しながら、それぞれの人生最初の難所とも言うべき問題に直面するとき、その人が自分だけの独特のある“しるし”を帯びることで生じる希求と、その「恢復」までの筋道を、方向性をもって探求しようとするときに最高の手助けとなる純文学であろう。そして個人個人でこのように形成される narrative が組織、大きくは社会へと、大きなひとつの共同体としての narrative として開かれていくことが作者の希求、すなわち《本当のねがい》であろう。

補足事項

（注釈1）

大江は『憂い顔の童子』のなかで、『私の先生のノースロップ・フライが、（中略）こういうことを書いています。真面目（シリアス）な読者とは、「読みなおすこと（リ・リーディング）」をする読者のことだ、と…… かならずしもそれは、もう一度読む、ということではない。そうではなくて、本の持つ構造のパースペクティブのなかで読むこと。それが言葉の迷路をさまよっているような読み方を、方向性のある探求（クエスト）に変える……』と記している。

また、『話して考える』（シンク・トーク）と『書いて考える』（シンク・ライト）』では、『多くの本を読みかさね、人生を生きてきもして、ある一冊の本が持ついろんな要素、多様な側面の、相互の関係、それらが互いに力をおよぼしあって造る世界の眺めがよくわかってから、あらためてもう一度その本を読む、つまりリ・リーディングすることは、はじめてその本を読んだ時とは別の経験なのだ』とフライの概念に沿う。

（注釈2）

シモーヌ・ヴェイユ、田辺保・杉山毅訳、『神を待ちのぞむ』（勁草書房）からの引用である。

《隣人愛の極致は、ただ、「君がどのように苦しんでいるのか」と問いかけることができるということに尽きる。すなわち、不幸な人の存在を、なにか陳列品の一種のようにみなしたり、「不幸な者」というレッテルを貼られた社会の一部分の見本のようにみなしたりせずに、あくまでわたしたちと正確に同じ一人の人間と見て行くことである。その人間が、たまたま、不幸のために、他の者には追従することのできないしるしを身に帯びるにいたったのだと知ることである。そのためには、ただ不幸な人の上にいちずな思いをこめた目を向けることができれば、それで十分であり、またそれがどうしても必要なことである。（中略）ただそれにふさわしい努力を傾けたということがあれば、それだけでもう、後になって機会が到来したとき、いつかは、不幸な人がこの上ない苦悩に苦しんでいるのに際して、その人を救うことができる助けの手をしっかりとさしのべるようになるのである。》

（注釈3）

《「狂気」なしでは偉大な事業はなしとげられない、と申す人々も居られます。私は、そうは思いません。「狂気」にとってなされた事業は、必ず荒廃と犠牲を伴います。真に偉大な事業は、「狂気」に捕られやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間によって、誠実に執拗に地道になされるものです。やかましく言われるヒューマンイズム（ユマニズム）というものの心核には、こうした自覚がある筈だと申したいのであります。容易に陥りやすい「狂気」を避けねばなりませんし、他人を「狂気」に導くようにしないことも避けねばなりませんね。平和は苦しく戦乱は楽であることを心得て、苦しい平和を選らぶべきでしょう。冷静と反省とが、行動の準則とならねばならぬわけですから。そして、冷静と反省とは、非行動と同一ではありません。最も人間的な行動の動因となるべきものです。但し、錯誤せぬことは限りません。しかし、常に「病患」を己の自然の姿と考えて、進むべきでしょう。》

（主要参考書籍）

大江健三郎 『叫び声』

『話して考える』（シンク・トーク）と『書いて考える』（シンク・ライト）』

『憂い顔の童子』

優秀賞

「Good Luck」

アレックス・ロビラ 著
ポプラ社

看護学部2年 宮崎 雅子

「幸運のストーリーは・・・、絶対に偶然には訪れない。」この本を読んで私が一番印象に残った言葉である。それならば、幸運とは何か。どうすれば幸運を手に入れることができるのか。幸運は偶然自分に訪れるのを待つものではなく、自らの手で作り出すものであるということをこの本は教えてくれた。

この本では手にした者に幸運をもたらしてくれるという魔法のクローバーを探し、幸運を自らの手で作り出そうと追い求めるシドと、幸運が訪れるのを待っているノットという2人の人物が対照的に描かれている。私はどちらかといえばノットのように幸運が訪れるのを待つばかりで自分からは何も行動しない人だと本を読みながら感じていた。しかし、それではどれだけ待っても幸運を手に入れることはできない。幸運を手に入れるためには何が必要か。それは下ごしらえをすることである。幸運が訪れないからには、訪れないだけの理由がある。幸運をつかむためには、自らしたごしらえする必要がある。幸運が訪れるのを待っているノットは何もしないでただクローバーを探し歩いた。一方、幸運を自ら追い求めるシドは、幸運を手に入れるために偶然を待たずに、クローバーを自分で生やすため古く乾いた土を新しい土に入れ替え、湖から水流を作り水を引き、日光を入れるために古い枝を切り落とすというような下ごしらえをした。どんなに大変でも今日できる下ごしらえはその日のうちにしまい、次の日に見落としはしないか探す余裕を作った。そんな苦労をこつこつと重ね、幸運を餌にするような人の甘い言葉に耳を貸さず、できることを全てやりきったシドは魔法のクローバーを生やし、手にすることができた。幸運をつくるというのは、チャンスに備えて下ごしらえをしておくこと。

この物語は、子ども向けのおとぎ話のようにも思えるが、学生の私が読んで、社会人が読んで何か考えさせられるものだと感じた。そしてこの本は物語そのものだけでなく、あとがきまでも、心に響くものがある。「この本を書くのには8時間しかかからなかった。だが、この本を考えるのには3年もの月日がかかった。」と書かれている。つまり3年という月日が、8時間の執筆のために費やした下ごしらえの時間だったということである。その後こう続く。「人はもしかしたらたった8時間かと思うかもしれない。だがもしかしたら3年もかかったのかと思うかもしれない。前者は、運の訪れを待つ者たちのこと。後

者は、幸運への下ごしらえをできる者たちのこと。」これは、著者が最後にもう一度読者に考えさせているのだと感じた。

私の場合はこの物語を、勉強やスポーツに置き換えることができる。試験で良い成績を残したいとき、試験時間はたったの60分かもしれないが、その60分のために、日頃の授業をしっかり聞く必要がある。試験勉強に何時間も費やし、いい成績を残すための「下ごしらえ」をしなければならない。私は試験勉強をしていても「明日やればいいか」と妥協して寝てしまうことがある。しかし、下ごしらえを先延ばしにしてしまえば、幸運は絶対に訪れてはくれない。寝てしまった次の日は「できることはやってしまえばよかった」と必ず後悔をする。それは幸運を手に入れる下ごしらえをおろそかにし、自らチャンスを逃してしまっているということだと気がついた。そうやって今までにどれほど幸運を手にするチャンスを逃してきただろうか。しかし、この本を読んで準備することの大切さを学び、今後の自分がチャンスを逃さないために何をするべきか明確にすることができるようになったと感じる。

人それぞれ夢や目標が違うため、そのための下ごしらえの内容は変わってくる。しかし、目標のための下ごしらえは誰もがしなくてはならないもので、おろそかにしては幸運は手にできない。そして、できることをすべてやったら、焦らず、あきらめないこと。そうすれば、幸運は必ず自らの手で掴むことができる。「誰もが幸運を手にしたがるが、自ら追い求めるのはほんのひとにぎり。」という言葉が本の中にあった。私は、まだそのひとにぎりの中にはいない。しかし、この本を読んだことをきっかけに幸運を自ら追い求められるひとにぎりになりたい。そして、この物語を素直に受け止め、幸運を手に入れるための下ごしらえを妥協せずにできるひとになりたい。

所蔵図書館 右京図書館

「Good Luck」 アレックス・ロビラ/著 ポプラ社

優 秀 賞

『蜘蛛の糸』（強い心）

芥川龍之介 著

保健医療学部2年 小針亜九

私がこの作品に初めて出会ったのは、まだ親に絵本を読んでもらっていた小さい頃である。その時は生々しい絵と残酷な内容で、単純に「恐い本」という記憶しかなかったが。今回もう一度読み返してみても様々な事を考えさせられた。

物語はお釈迦様が極楽の蓮池を歩いているところから始まる。ふとお釈迦様は蓮の葉の間から地獄の底を見ると、そこにカンダタという男がいた。この男は多くの他の罪人と同じように地獄へこうして来る程度の悪行を働いていた。人を殺したり、家に火を放ったりする事もあった大泥棒である。しかし、この男にもかつて蜘蛛を助けるという善行をした事があった。お釈迦様は地獄にいるカンダタを哀れに思い、極楽の蜘蛛の糸を地獄にたらすのである。

このように始まるのだが、蜘蛛を一度助けた事が彼の働いてきた悪行を帳消しにするほどの事だろうか。お釈迦様がそのようにした理由の一つには、その時の彼の心持ちがあり、それが肝心だったのではないだろうか。彼は一度蜘蛛を殺そうとするも、「いや、これも小さいながら命のあるものに違いない。その命をむやみにとるといふ事はいくら何でも可哀想だ。」と思いその蜘蛛を助けた。恐らくその時ただ蜘蛛を殺すのを止めた程度では救われなかったのではないだろうか。彼の中には命をむやみに奪うべきではないと命を大切に思う心があったようなのである。また、仏教には黒縄地獄というものがある。これは熱く焼けた縄で打たれ、焼けた鉄の糸で切断されるなど、これらを約十三兆年続けるといわれているものである。お釈迦様も少しは哀れに感じたのだろう。

そして、物語はカンダタ側へと移る。地獄の責め苦に疲れ果てたカンダタがふと上を見ると銀色の蜘蛛の糸を発見する。救いが来たと喜び彼は糸を伝って上へ昇っていく。やがて、しばらく昇るうちにさすがのカンダタもくたびれ。少し休憩を取ろうと下を見る。血の池、針の山もすっかり下に見える、と思っていたと、自分が昇ってきた蜘蛛の糸を伝い、たくさんの罪人が蟻の行列かのように昇ってくるのである。カンダタは「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己（おれ）のものだぞ。お前たちは一体誰に尋（き）いて、のぼってきた。下りろ。下りろ。」と喚いた途端、真逆さまに落ち戻る事になるのであった。それを見ていたお釈迦様は悲しそうな顔をして去っていくのである。カンダタは自分だけが地獄から抜け出そうとする自身の無慈悲な心ゆえ、再び地獄へ落ちる事になったのだ。

カンダタは身勝手な自己保身ゆえに再び落ちる事になってしまった。人は余裕がなくなると弱さが出てしまうものだろうか。カンダタはかつて蜘蛛を助けたときのようにはいかなかったのだろうか。この本のテーマは非常に難しい。

「何が正しい」ということではないだろう。正解が導きだせないなりに私の考えがある。お釈迦様は悪行ばかりに染まっていたカンダタが密かに見せた小さな命を大切に強い心確かめたかったのではないだろうか。か細い蜘蛛の糸に何千もの人々がつたい、命がかかっている状況で本心を見たかったのではないだろうか。最後にお釈迦様が悲しそうな顔をするのは、もう一度命を大切にカンダタを見たかったからではないだろうか。

人は他人なしでは生きてはいけないと思う。他人なしの幸福も存在しないと思う。人が人を支え合いそれが積み重なる事で人生は出来ている。普段気にしない事ではあるが、よくよく思い返すとすべて他人とのつながりである。人のために何かをするということはひとつのやりがいでもある。しかし、いざという状況になれば人は物語のカンダタのように弱い部分が出てしまう事もある。カンダタのようになってはいけない。身勝手に自分の事だけを考えて生きれば、糸が切れたように必ず見返りが来ると思う。強い心を持ち自分の目線だけではなく。カンダタの後から昇ってきた他人の目線にもなるべきだ。

「蜘蛛の糸」は短い物語である。罪人のカンダタが自らの欲のために救いの道を失う。この短い中で人の弱さをわかりやすく表現している。小さい頃に感じた「怖い」という記憶とは別に人というものの恐さを感じたが、カンダタのように身勝手な行動をとってはいけないということも学んだ。人間の本質をわかったうえで信頼できる友達、仲間がいることはすばらしいと思った。人とのつながりを大切に、他人のことも考える事のできる「強い心」を持ちたい。

『蜘蛛の糸』 芥川龍之介 青空文庫 右京図書館

優 秀 賞

『地下室の手記』を読んで

ドストエフスキー 著
光文社文庫

鍼灸学部2年 中尾 麗花

「僕は病んでいる」これが冒頭の一文である。初めの一ページを読んだとき、最後まで読み終える自分が想像できなかった。それは表紙を開いてすぐ、首をかしげてしまうほど、難解かつ複雑だった。

まず第一章「地下室」は手記の書き手である男の自虐と憤慨に満ちた持論が、延々と繰り広げられている。私がこの本を手にとってから、内容をかろうじて理解できるようになるまで、かなりの時間を費やした。まるで哲学書を読んでいるかのような気分させられた第一章には「意識」という言葉が度々でてくる。男はたいそうな自意識過剰で、また自尊心の非常に高い人物である。この手記は、本来日記のようなもので読者は存在しないのだが、あたかも読者がいるような口調で終始書かれている。しかも決まって彼らは、著者である男に対してひどく反論を繰り返す。そしてこの反論も男の自意識過剰の産物であり、言ってしまうと彼は自分の意見に対する意見を自ら書いて、それに激昂するという一人芝居を展開しているようだ。

男は手記の中でしきりに怒鳴り散らしており、一つ的话题に対して意見を二転三転させることもよくある。しかし彼の理論には共感できるものがあることも確かだった。そして彼の理論は極めて主観的で、一方的、かつ強引で、彼がいかに「地下室」にこもったまま他人の意見に耳を傾けてこなかったかがよく分かる。

彼は自意識過剰であると同時にとても自虐的な一面も持っている。厄介なことに彼自身の自虐性が彼らの誇りに傷をつけ、それが大きくなっている。男の性格を一言で表すならば、「激情家」という言葉がふさわしいと思う。彼らは単に自尊心や自意識が強いわけではない。自らの行動に対する罪悪感が自らの心の中にあることを自覚している。それが原因となって、後悔し、苦しむ。だが、結局は復讐、それも傍から見れば、全く意識のないと思える行動に走ってしまうのだ。

第二章「ぼた雪に寄せて」では、彼が若かった頃の復讐劇の様がつづられている。まず一つ目は、ビリヤード場でたまたま出会った将校から相手にされなかったという理由のものだ。ここから男の奇妙な性格が徐々に現れはじめる。初対面の身分の高い相手に見向きもされなかった、ただそれだけの理由で夜な

夜なヒステリックに苦しむ男の姿は、異様だと思った。彼の自意識の強さは、私にはとても理解のできないものだった。

読み進めていくうちに、彼は非常に怒りっぽい性格というのがよく分かった。普通の人間なら全く気にしないようなことに激昂し、金と時間をかけてまで復讐に行く男だ。私はすごいと思ったり、なぜそこで、と驚いたりあわれむ気持ちになり、この作品でいくつもの感情をもった。それは私自身が表面的には否定しているが、心の奥になにかしらの共感をしているのだと感じていた。そしてこんな男が実際にいたら、とても迷惑だと思った。しかしこの男は、よく言えば自分の感情をまっすぐ表面にだしていることになる。もちろん私はここまでの感情を表に出すことはできない。だが、私は心の中でむんむんと怒りを抑えていたり、その八つ当たりのような感覚で、他人を見下したりもしていた。そんな時、某先生が「他人を見下すのは、自分の中に不安があるからだよ」とおっしゃっていたのをきいた。それは自分に言われているように感じ、ふと私自身が、なんとなくそのことに気づいていて、でも認めたくなくて知らずに気づいてなかった、気づいていないふりをしていたのではないか、この男も私と違うのは、感情を表に出している所の違いで、同じような感覚があったのではないか、と思った。

最後にリーザという女性と対話する場面がある。ここまでくると、身勝手、自己中心的な男の性格があらわになった。ここでの「自分がいつでも好きな時に茶が飲めるためなら、俺は世界が破滅したって一向にかまわないのさ」という一文がとても印象に残っている。自分の家を訪ねてきたリーザに対しても腹を立て、そのせいでリーザとは二度と会えなくなり、そこで、初めて自分の愚かさに気づき、後悔するというものだ。

ここまで男のことをひどく書き連ねたが、この男を好きになる人間はおそらくいない。住所を教えておきながら、その訪問者に対しひたすら怒声をあびせ、拳句の果てに泣き出すような男なのだから。しかし彼をみていると、嫌悪はすれども、どこか拒絶できない、そんな気分させられる。彼の存在こそ、現代人に対する批判そのもののよう思えてくる。私たちの心の奥にある忌むべき部分、それが彼であるように思えた。彼は気づいてほしいのかもしれない。自分の存在を手記という形に変えて、私たちの心の弱い部分を常に狙っている、そんな気がしてならない。

ドストエフスキー：『地下室の手記』
光文社文庫

読書感想文コンクール入賞者写真



上段左から、『樋口図書館長』、最優秀賞『高田真由子』さん

中段左から優秀賞『吉田遼平』さん、『宮崎雅子』さん、下段左から『小針亜九』さん、『中尾麗花』さん